

詐欺 男

岩田 定子

その男が店にやって来たのは午後一時、うそ寒い、店の閑散時だった。妙にせかせかした中年男で、二月の寒空にオーバーも着ず、相当くたびれた焦茶の洋服にマフラーのパツとしない弱小企業の従業員とも鑑定される人物。「いらっしやいませ」と声をかけると、瞬間何かにおびえたように立ち止まった。「ミルクをくれ」というブランドを聞くと「何でもよい。」M社の小罐を渡すと「もっと大きいやつだ。」さらばと大罐を出せば「この品ではない。L社のだ。」その間にも加勢に売場に出て来た娘に、カゼ薬、消化剤、強心剤から駆虫薬、はては痔薬まで次から次と取り出させては並べさせて、一々難ぐせを付け結局は最小包装の正露丸とオロナインだけ

した。ごまかす気か」とすぐんで払いませぬ金のつり銭を強要する鉄面皮さ。念のためレジを調べても受取った形跡は全くない。大風呂敷は明らかに彼の陽動作戦だったのだ。男は粘つくく陰湿な口調になるかと思えば突如狂暴なダミ声でがなり立てる。あごの張った四角な顔を見つめている内に私は不意に、ある凶悪犯人の顔を連想した。激しい恐怖を呼びおこして全身の細胞が硬直した。何とかして一刻も早くこの場を処理しなければならぬ。

当面の危険から脱出する方法を発見せねば、早く早くと、あせるのだが現実には無策に敵の前につっ立っているだけで行動は何一つ出来ない。男が一步前に出て来た。恐怖が倍になって、あらゆる思考力がけし飛んだ。フラフラしながら、どうやって男の傍をすり抜けたのか入口にたどりついていた。そしてポカーンとしている男に向かって「今派出所へ行ってポリさんをお願いします。すぐですから待っていなさいね」とバカにいいいに男に声をかけて走り出したのが今でも笑止に思い出される。舗道を走りながら振り返ると男は何か言いながら追ってくる。暫く走って再び振り向いた時は丁度敵が私の行く手と反

で引上げた。とにかくエキセントリックな客なのだ。ところがそれから約一時間後、娘が買物に出かけ私一人店番していると、くだんの男が再び現れたのだ。内心ムカッとして、男の顔を相当強い目で見したが、男はおく面もなく、又々先刻同様、医薬品総指名をやり出した。警戒して、定位置を動かず、男の注文品に「品切れです」とか「扱っていない」などと応答して、ひたすら娘の帰りを待った。と男は「先刻買い忘れたミルクをくれ」と言う。「本当にLミルクの大罐を買われるのですね」と念を押して代金を請求し、先刻から、やたらにチラつかせている一万円札を受取ろうとすると「ミルクをこれに包んでくれ」とバカ大きなあかじみた大風呂敷を土間に拡げる。又しても男の非常識さに逆上しかかったが、それでも神経痛で動きの鈍い左手を操りつつ包み終えた。さて、それからが大変だった。再びミルク代を請求すると、男は急に横柄な威かく調になって、あべこべに「最前渡した一万円のつりをくれ」と言うのだ。「一万円札を持っているのは見たが支払う前に、いきなり大風呂敷を拡げて包ませたのだ。受取ってはいない」「いや確かに渡

対の方向を、すごい速度で走り去って行くのが見えた。焦茶のくたびれた背広で、ミルクの包まれたあの風呂敷を抱えて……。私はへたへたと舗道にひざをつけて坐りこんだ。けだるい失調感覚がいつまでも続く中で「あぶないのだ。あれこそつり銭詐欺なのだ。世の中は本当に恐いのだ。しっかりせねば」気がつくと同じ言葉を繰返し繰返しつぶやいていた。

〈講評〉

よろしい。眼前に実景を見るような叙述です。

昭和46年度 作品集

大阪市立婦人会館

随想